



混

線

Kevin

Spring

ここは、どこだろう。

...途切れ途切れに、声が聞こえる。

しかし、重い瞼は、光を遮断し、言葉は、音にならない。私は眠っているのだろうか、それとも死んでいるのだろうか。

「○※△□×」

恵理の声だ。

「.....ね、ちいちゃん...」

今のところ分かっているのは、氏名、住所、生年月日、電話番号、そして、この病院の耳鼻咽喉科を受診しに来たということ。あるときは充分過ぎる情報なのかも知れないが、今は、あまり役に立っていない。

「小林さん、聞こえますか？」

「.....」

すぐに目を覚ませばいいのだが、万が一このまま眠ったままだったら...。..いや、そんなことはない。今、そう、刻々と動く、今、目を開けるかもしれない。

「小林さん、小林智恵(ちえ)さん、聞こえますか？聞こえたら、私の手を握ってください」

返事は、ない。私は、彼女の手を、そっと元に戻した。ベッドサイドの棚に彼女の持っていた茶色いバッグを入れ、鍵を閉め、病室を出た。

ショートパンツにTシャツ姿の少女が不機嫌な表情で食事をしている。向かいには、父親だろうか、男の姿がある。その間に女の子より年下の男の子が座っている。イスは四つあるが、一つ空いているようだ。父親らしき男が少女の方を伺いながら、何か言いにくそうに質問を投げかけたようだ。少女が答える前に男の子が、男に質問を投げかける。男は再度少女に問いかける。少女は食事を残したまま、どこかへ行ってしまった。

私は、ナースステーションから呼びに来た同僚と一緒に、病室を出ようとして、足を止めた。何か気になる音がする。

「どうかしました？」

「この音」

「...携帯ですよ。私、先に行って報告します」

私は、棚の鍵を開け、小林さんのバッグを取り出した。入り口に蓋やチャックがついていないものだったので、揺れながら点滅する携帯電話がすぐに確認できた。一旦止まり、手の上で再び、揺れはじめた。……。数秒の間に様々なことが頭に浮かんだ。

「小林さん、代わりに出させていただきます」

顔をちらりとみて、通話ボタンを押し、耳にあてた。

「あ、小林さんですか？」

「すみません、すぐにこちらからかけ直します」

私はそう答えると、素早く着信番号をメモし、バッグに戻した。

二段ベッドの片割れと、学習机、本棚、洋服ダンス、電子ピアノが八畳くらいの部屋にドン、ドン、ドンと置いてある。とても味気ない。この人の部屋なのにこの人のために作られた部屋じゃないみたいだ。さっき家族の食堂から飛び出した少女がこの部屋に入ってきて、学習机の前のイスに座った。机の上の真ん中に置いてあるノートパソコンを開き、何か打ち込んでマウスを動かしている。ディスプレイには人の写真と共に文字が並ぶ。それを真剣な眼差しで少女は見る。…少し躊躇ったあと、表情は曇り、悪いことでもしたかのように急いでパソコンを閉じた。

「若松中央病院の山下と申します。突然、申し訳ございませんが、先程小林智恵さんの代わりに電話に出たものです」

「……」

「もしもし？小林さんの携帯に電話なさいましたよね？」

「あ、はい。それは、…そうなのですが、病院って、何かあったんですか？」

「今、こちらに入院しておられます。失礼ですが…、小林さんのお知り合いの方でしょうか？」

「…あ、…え？……あ、はい」

「小林さんのご家族に連絡取れますでしょうか？」

「いえ…」

—山下さん、505号室、行ってくれる？—

—はい、分かりました—

「申し訳ございませんが、お名前をお伺いできますか？」

「安達、です」

「安達さん、ですね、詳しいことは、…一度病院にお越し頂けますか？」

—山下さん！急いで—

事態を飲み込めないまま、僕は電話を切った。ただの偶然ではなく、あの小林智恵なのだろうか。そうであってもなくても、行くべきではないと始めは思った。しかし、時間が経つにつれ、やはり彼女なのだという思いが強くなり、翌日の午後、僕は病院にむかうこととなった。三日間眠り続けている、という彼女は、顔色が少し悪いものの、人工的に呼吸しているわけでもなく、すぐにでも、目を覚ましそうに見えた。看護師の山下さんは、手早く体温計を差し込み、言った。

「ときどき、反応はするので、声を掛けてあげてください」

山下さんに、彼女の手を差し出された。戸惑いながら指先を握ろうと手を触れると彼女の手は、ぎゅっと僕の手を掴んだ。

「小林さん、安達さんですよ、わかりますか？」

僕の汗なのか、彼女のなのか、手にはしっとりとした感覚がある。体温計の電子音が鳴りクリップボードに挟んだ用紙に記入すると、

「それじゃ、小林さんまた後で来ますね」

と声を掛け、僕に向かって、

「安達さんに来てもらって心強いと思っていますよ、きっと」

と言い、病室を出て行った。

彼女と二人きりになった。

安達順也(じゅんや)、仕事、壊れて使えなくなったものを直してまた、使えるようにすること。
僕は物を直す。人は治せない。彼女を物だ、なんて思わない。壊れているとも思わない。・・何故、僕はここに来たのか。僕に出来ることはあるのだろうか？

「恵理、何か欲しいものがあったら持って行っていいよ。あげられないのもあるけどね」

「えー、本当？じゃあ・・あたし、これ欲しい」

「いいよ」

「嘘？これはダメって言うと思った。気前いいじゃん」

「今度のところはもうちょっと狭くなるから、もういらないの」

「もったいなーい。家に送っちゃえば？」

「私が戻って住むならまだしも、家は物置じゃない！ってお母さんのイライラが始まっちゃうでしょ」

「それもそうだね、これをネタに家に帰って来い攻撃にあうに違いない」

「どうする？」

「うーん、欲しいんだけど、・・うちも狭いからなあ」

「じゃあ、これは、...さよならっと」

「捨てちゃうの？」

「・・・業者の人にでも頼んで、引き取ってもらおっかな」

階段を上がってくる足音が近づいて、私は慌ててベッドに潜り込んだ。トントン。

.....トントントン、香織、入るぞ。

「もう、寝たのか。ごはん、いいのか？」

「.....」

お父さんのことが、嫌いなわけじゃない。ただ今は、これからまじめな話しますっていう瞬間を少しでも先延ばしにしたいのだ。

「おかえり。・・今日、引取りって言ってなかったっけ？」

「そうなんだけど、連絡つかなくて・・・。住所、メールに書いてもらってたからアパートに行ってみただけど、留守だった」

リビング兼事務所のパソコンを見ている元基(もとき)の前を通り過ぎ、僕はやりかけていた作業の続きをやろうと、部屋の奥にある作業場へ行った。

「急用ができたのかもしれないし、後でもう一回電話してみる」

「ああ。...順也、」

「.....ん？」

「・・・いや、何でもない。わりい、ちょっとでてくるわ」

「菊地と申しますが、山下さん、ですか？」

「はい、そうですが、...まどか？...香織ちゃん？」

「香織です」

「香織ちゃん？びっくりした。お母さんに声そっくり。久しぶりだね、皆、元気？」

「...は、はい」

「そっちの生活には慣れた？」

「...あの、佳苗さん」

「佳苗ちゃんがいいよ」

「最近、母に会いませんでしたか？」

「え？最近？そうだねえ、しばらく会ってないよ。引っ越す前も電話では話したんだけど、結局お互い都合がつかなくて、会えずじまいだったんだー。どうして？」

「.....」

「何か、あったの？」

「家を...出て行きました」

「え？まどかが？...いつ？今日？」

「五月の最後の週です」

「それじゃあ、え？...それから一度も帰ってきてないの？」

「はい。たぶんもう、帰ってこないだと思います」

「え？どういうこと？連絡、取れないの？」

「はい、携帯もやめちゃってるし、おばあちゃんのところも行っていないみたいで。父は、旅行に行ったって言っているんですけど、そんなの変だと思うんです」

「...旅、行...」

「お母さんの友達、私、佳苗ちゃんしか知らないし。何か知ってるんじゃないかと思って」

「ごめんね。私のところには、今のところ連絡はないけど、もしあったらすぐに電話するね。香織ちゃんも健人(けん)君も、大丈夫？困ったことがあったらいつでも連絡して」

「はい、大丈夫です。それから、...父には黙っていて欲しいんです、私が佳苗ちゃんに連絡したこと」

「...うん、分かった」

まどかは、どこへ行ったのだろう？ご主人の実(みのる)さんが言っているというように、旅行に出ている、ひょっこり帰ってくることも考えられるが、そうでないとしたら...。まどかは探して欲しいだろうか？

私は、まだ混乱しながらも、携帯は買ってもらえないという香織ちゃんのパソコンのメールアドレスを聞いて、電話を切った。もう少し聞きたいこともあったが、彼女はまだ子供だ。心配も不安も最小限に止めたい。生きては、いる。不安ながらも、そんな確信めいた思いだけはあった。

考えてみれば、僕はあれからちっとも前に進んでいない。相も変わらず、どっちつかずで同じところをただウロウロして、薄ぼんやりと生きているのだ。元基が僕のところを出て行ってから、僕のぼんやりは益々色濃くなった。何かにすぎるように病院へ行き、ただただ彼女と時間を共有した。そこには懺悔じみたものもなければ、甘美な空気もなく、まるで僕のほうが深く眠っているみたいだった。それは元々彼女が持っていた性質のためかもしれない。僕は、次第に彼女の意識をつかまえたい、と思うようになった。

私は、クリーニング店のテレビを見て、はっとした。なぜだか死んだこと、になっているようだ。店の女主人は私にお茶を出すと、ぶつぶつ言いながら落ち着きなく動き回っている。私はテレビと、時々視界に入ってくる女主人を見ながらじっとそこへ座っている。スカートをはいているから正座しているけれど、足がしびれてきて崩したい。

「あんた、名前なんていうんだい？」

力のない無愛想な顔で女は私を覗き込んだ。自分の本当の名前は言っではいけない気がした。

「かおりです」

年は、住所は、家族はという質問とその答えが頭の中で巡っていたが、女は興味がないのか、すぐに立ち去ってしまった。部屋を見渡すが、もう、気配すらない。

「こんばんは一、できてる？」

私は、びりびりする足をなんとか床につけながら、声が聞こえる店先へ向かった。

「すみませんが、お店のかた、出かけたみたいです。さっきまでいたのですが」

「……いやだあんた、いつからそんな冗談言うようになったの？」

…いつ、から？

「まあ、いいわ。できてるんでしょう？ほら、それぞれ、あるじゃない」

指差されるまま、黒い礼服を取り、客に渡した。

「大丈夫なの？」

「…？はい」

客は私を気にしながらも、じゃあお世話様あーと大声で言い帰っていった。

選ばなかった方の選択をしていたらどうなっていたらろう。例えば、今朝、仮病をつかって学校を休んでいたら…。好きなだけ眠る。昼過ぎ頃、眠るのに飽きてベッドから出てみる。イスに座ってパソコンを開く。様子を見にお父さんが部屋へ入ってくる。具合の悪いフリをするが、バレて静かに怒られる。

「アハハハハ」

私は大音量の笑い声にどきっとして顔をあげた。髪の毛で視線の先が他の人たちに分からないように、そーっと。どうやら今日一番の山場を迎えているようで、自分のことではなかった。私が笑っていてもいなくても、もっと言うなら居ても居なくても変わらないように授業は進んでいった。

巡回が終わったら、次の点滴の準備、カルテの整理をして…。私は先々やらなければならないことを考えながら、小林智恵さんの病室に入った。外灯を背中に浴びベッドサイドに浮かび上がる人影に驚きで声も出ず、慌てて病室の電気をつけた。

「…柿沼さん。また、眠れないんですか？」

「他の人たちに迷惑だから、出てきたんですよ」

確かに、同室の患者から柿沼についての苦情を聞いていた。独り言、ため息、がさがさごそごそ、たまったもんじゃない、と。それから、あくまでも噂だが、あの人の隣になると物がなくなる、とも。私は小林さんのベッドサイドに行って、機器の数値を記入し、点滴の速度を少し緩めた。

「何か、言われました？」

「いいんです。もう、聞いてもらいましたから。」

小林さんに、ということだろうか？眠っているとはいえ、知らない人がやって来て、話を聞かされるなんて、小林さんには気味の悪い思いをさせてしまった。しかし、答えない人に話しをする柿沼さんの心を思うと、あまり責めるのもかわいそうだと思ってしまう。

「さ、戻りましょうか。もう、他の患者さんの病室に入っちゃだめですよ。どうしても眠れないときは、ナースコールで呼んでいいんですからね」

私は、柿沼さんと一緒に小林さんの病室を出た。柿沼さんを病室まで送りとどけ、再び巡回を始めた。

なぜだか私は柿沼さんを見ると、母を思い出し、複雑な気分になる。一度見舞いに来て激しく言い争い、二度と姿を現さない娘さんに、自分のことを重ねているのかもしれない。

午前八時に申し送りをし、九時前には帰宅していた。テレビをつけ、風呂に入り、パソコンのメールをチェックした。香織ちゃんからメールが届いていた。母のことは何か分かりましたか？もう、あきらめた方がいいんでしょうか？というような内容だった。二～三ヶ月前、参加しなかったが、看護学校の同窓会があった。先週その名簿が送られてきていた。未開封だった封筒を開け、名前を目で追っていた。この中の誰かに連絡をしているとは考えにくい。

菊地(旧姓 原)まどか。彼女の名前を見つけ、彼女のことを考えながら私は、眠ってしまった。

母に似て、派手で愛嬌のある健人(けんと)をみていると、むかつくことがある。お姉ちゃんは、友達連れてこないのとか無邪気に言うときとか。心が動揺したあと、こいつに一番ダメージを与える言葉は何かと頭の中をめぐる。私は、完全なる父親似。母の要素は、一つも見つけられない。女の子はお父さんに似ると幸せになるんだよという、根拠のない無理やりな誉め言葉はもう聞き飽きた。

近頃父は食事をあまり作らなくなった。夜、家を空けることもある。始めは、喜んで買ってきたお弁当を食べていた健人もさすがにもう喜ばなくなっていた。

「健人、今日何食べたい？」

「ホットケーキ！」

「だから、ごはんだってば」

「なんで？誰が決めたんですかあ、ホットケーキがごはんじゃないってえー。いつ？何時代に？どこで？」

「…はいはい、分かりました。作るよ、ホットケーキ」

「やったー！オレもやるう」

健人はお母さんがいなくなったことどう思っているのだろうか？
旅行しているという父の言葉を本当に信じているのだろうか？

「オレ、毎日ホットケーキでもいい」

「やだよ、太る。あ、まだひっくり返さないで」

二人でじっと一枚のホットケーキを見守る。

「表面に、ぷつぷつがでてきたらいいよ」

「何個？」

「…六〜七個？もっとかなあ」

一、二、三、四、五六七、八。

「えい！」

「おー、うまいじゃん、健人おー」

これを繰り返し結局一人あたり十枚近くずつ平らげた。

翌朝、なかなか起きてこない健人の部屋に行くと顔中、真っ赤にして眠っていた。ぶつぶつと大量の湿疹がでているようだ。

「健人、大丈夫？」

「うーん」

七時四十分、もう家を出ないと遅刻してしまう。苦しそうな健人。熱もありそうだ。私は健人の部屋を飛び出し二階の父の部屋へ行った。

「お父さん、健人が」

戸の向こうで眠っているはずの父は、そこにいなかった。布団も敷いてない。昨日帰って来ていないのだろうか。時計を見ると正午を過ぎていた。学校にまだ連絡していない、どうしよう。

お母さん！あー、よかった。健人が、

「今から、旅行に出るわよ」

「学校は？」

「行かなくていいのよ」

「健人は？」

「あの子なら先に行ってるじゃない」

えー？だって健人は…。

あれ、誰？お母さん、誰この子。

「マカ」

すごく、生意気そうなこの子はお母さんに纏わりつきながら、そう言った。

マカ。…痛い！噛まれたよ…。

「覚えておいてね」

怖かったから私はうん、と頷いた。

ここは、私達が住んでいるマンションだ。誰かから逃げているのに、玄関の鍵が一向にかからない。ドア枠とはまるで違う大きさの、隙だらけのドアを見て、あきらめて風呂場で隠れてじっとしていた。いつのまにか、私一人になっていた。

誰かが近づいてくる。

もうすぐ扉を開けられる…。

…今私が眠っていたのってどこ？目を閉じたまま、思い起こす。ああ、いつもの家だ。それでもなお、ここはあのマンションで、母もいて、ここへ来る前の生活で、今までのことは夢、母がいなくなったことも夢だったのだと、心から願った。

目を開ける。

暗闇の中で目にする全てのものが、私がここに居る、という現実を突き付けていた。

マカ…覚えておいて…あの子は、誰なんだろう。

「恵理？お母さんです。元気ですか？智恵なんだけど、電話にでないしメッセージ入れてもかかってこないの。なにかあったんじゃないかなければいいんだけど。心配だから様子見てきてくれないかと思って。…電話下さい」

仕事を終え、携帯をチェックするとメッセージが入っていた。私はちょっと面倒くさいなあと思いつつも、歩きながら母に電話をかけた。

仕事辞めて新しい所探したり、引越しの準備とか色々忙しいんじゃない、と言うと、智恵はあなたと違っていつも連絡したら電話をくれる、と聞く耳をもたなかった。近いんだから行ってみてよと念を押され、私は電話を切り、すぐに智恵の携帯にかけてみた。電源が入っていないようだったので、家にもかけたが、やはり応答しなかった。私は、最寄りの駅に着き、自分のアパートではなく、智恵のアパートへ向かうために電車に乗った。

一日は、まだ続く。

アパートに到着すると、部屋の電気はついていなくて、中に人がいる気配もなかった。唯一気になったのは、ドアに挟んであった紙だ。

畳まれていた紙を開き、まさか、とは思ったが、私は、この紙に書いている病院へ向かった。お姉ちゃんが、十日もの間眠ったままでいるなんて、信じられなかった。どうしてもっと早く気が付いてあげられなかったのだろうと悔やまれた。病院から母に連絡をすると私は、智恵の病室で、彼女が眠りから覚めるのを待った。

夜が明けて、両親がやって来ると私はひとまず家に帰った。疲れているはずなのに、じっとしているのが耐えがたく、たまっていた衣類を次から次へと洗濯機の中に放りこんだ。

アパートに挟んであった紙。

看護師さんが言っていたように、お見舞いに来てくれているという人が、知らせてくれたに違いない。恋人だろうか？...でも、私には、そういう人はいないと言っていた。

広い道幅の道路、片側一車線ずつ。両脇には背の高い木が整然と植えられている。どこかの建物に向かわせるための道路のようだが、それだけで、どこかの何の建物なのかは分からない。そんな景色が家の窓から見えた。畳の部屋には女性が一人。母親ぐらいの年だろうか。知らない人だ。でも相手は、私のことを知っているようだ。笑顔の中に品定めされているような感じをおぼえる。

.....ああ、まただ。ここでは、今までの自分はこういう人だったとか、全然あてにならない。自分が望んでいようがまいが、お構いなしに突然始まり、終わる。その度に、ここは私が生きている場所だと疑いも無く受け入れ、あ、違った、と思うのだ。

「いい眺めですね」

「楽しんでいいのよ」

お義母(かあ)さんはお茶を持ってきながら私にそう言った。

「あのう、」

問いかけようとしたのだが、お義母さんは新たな訪問者の元へ行ってしまった。..何の集まりだろう。人が次々と入ってくる。さっきまで広々としていた部屋がうそみたいに窮屈に感じる。見事なまでに知らない顔ばかり。ここで私は生活していけるのだろうか。

「智恵さん」

呼ばれた私は人をよけたり、挨拶したりしながらお義母さんのいる方へ急いだ。

エレベーターを降りてナースステーションの横を通り長い廊下を歩く。僕は、買って来た花束の香りの具合をもう一度確かめようと、鼻を近づけた。..満足して顔を上げると、反射的に体を引いた。彼女の病室から見舞人らしき人が出てきた。僕は、向こうから見えないように、少し手前にあった長イスに腰掛けた。

智恵と、どういう関係かということも気になったが、何より、直接お礼が言いたかった。私は看護師の山下さんに安達さんという人の連絡先を教えてもらえるよう頼んだ。

安達さんと智恵は、私が想像していたような関係ではないことを告げられたのだが、どうも腑に落ちなかった。

人に知られたくない関係なのか。・・・そうだとしたら、深く追求せずに見舞いに来てもらったほうが、智恵は喜ぶかもしれない。彼が知らせてくれなければと考えると、ぞっとする。関係はどうであれ、安達さんには、心から感謝している。その気持ちに変わりはない。

会食の内容が豪華であればあるほど、私の食欲はなくなる。それを隠すように、些細な仕事を見つけては一所に落ち着かずにいた。濃灰色のスーツを着た男が大丈夫か？と声を掛けてきた。その少し後方にお義母さんの姿があった。目が合った。`気がついている、という顔だ。私は目の焦点を遠くから近くに移ししっかりと向き直って、彼の顔をまじまじと見た。...突然体の奥から突き上げるものがあって、その場から離れた。

智恵のアパートを管理している不動産会社に事情を話し、合鍵を借りた。姉とはいえ、本人の了承なしに家に入るのは気持ちのいいものではない。荷造りの続きをして、家を引き払うなんて智恵はどう思うだろう？私は床に座ったまま半分荷造りされた部屋の物から物へただ、視線を移した。この前、ここへ来たときは、元気だったのにな、としみじみ思った。

「困りましたね...お察しします。ですが、こちらも次の入居者が決まっているもので、申し訳ないのですが・・・」

「そう、ですよ。・・・分かりました。何とかします」

そうは言ったものの、気が重い。

夏休み、一週間滞在する予定で、私は健人とおばあちゃんの家に行って来た。おばあちゃんは、お母さんのお母さんで、ここはお母さんが生まれた家だ。だから、ここへ来るんじゃないか、という期待も私にはあった。

お店をやっているお祖母ちゃんは、夕方健人と私にご飯をたらふく食べさせてくれると、一人で出かけて行った。おばあちゃんがいなくなって、この家の中は二人きりなのに、まだ他に誰かいるような感じがした。仏壇の写真はそれが誰であっても、怖い。おじいちゃんの顔は写真でしか見たことがない。これが香織のおじいちゃんだよと言われるから、私のおじいちゃんなんだと思う。全然血の繋がりのない人を指されて、これがおじいちゃんだよと言われても、そうなんだ、と思うだろう。

電車の乗り換えを済ませた私は、安心したのか、眠ってしまった。景色が暗くて、あれ？夜と一瞬思ったが、ああ、乗り過ごしてしまったのだと、次の停車駅のアナウンスで気が付いた。電車は、環状線だったので、乗ったままでいることにした。すっかり眠気の覚めた私は、変わりばえのしない景色を見る代わりに、読書感想文用の薄い本を開いた。私がいけない間、お母さんがお祖母ちゃんのところに来て、健人だけを連れてまた何処かにいってしまったりしないだろうか。すると私は、あの家でお父さんと二人になるのか。それとも、……あ。紙のしおりはひらひらと床に落ちた。立ち上がろうとすると、電車の扉が開いた。風にあおられて舞い上がり、人の足で見えなくなった。束だった足がばらばらになると、床にしおりはもう見当たらなかった。本に目を戻すが、文字が見えるというだけでちっとも頭に入ってこなかった。膝の上に乗せていたリュックにしまった。

「おばあちゃん、お姉ちゃんは？」

「香織なら、朝早くに出かけたよ」

「…どこに行ったの？」

「友達に会いに行くって言っていたよ」

「……友達？」

「なんだい、健人、お姉ちゃんいないと寂しいの？」

「…そんなんじゃないよ」

トイレに入って座っていると、ドアが開き、3～4歳くらいの女の子が、中に入ってきた。

「ママ」

私は拭いたりする間も無く下ろしていた下着を上げた。

「おしっこ？」

「……」

ふくらはぎあたりをつかまれている。まだ、おしっこという言葉は分からないのだろうか？抱き上げると、唇が赤いのに気がついた。私は、化粧台の前へ行き、その赤い原因を突き止め、改めて女の子の顔を見つめた。何か言おうと思い息を吸い込むと、この女の子よりもっと小さい赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。…一体、何人いるのだろうか。とにかく女の子を抱いたまま泣き声の場所へ向かい、代りに泣く子を抱いた。もう赤い唇のことなど、どうでもよくなっていた。女の子はその背中をじっと見つめている、と私は感じた。

検査のため、一時入院した他の病院でもはっきりとした原因は分からず、智恵は、再び若松中央病院に戻るようになった。治療する術はなく、ただ目を覚ますのを待つのみで、覚醒した後もどうなるか予測がつかないと医師も頭を抱えた。両親は、長期戦に備えて、智恵を個室から二人部屋へ移動することに決めた。それから程なく、智恵の新居は一度も住むことのないまま、引き払い、身の回りのもの、衣類などはできる限り私が預かり、残りの家具や電化製品は実家に送った。そのときに、智恵が処分したがっていた家具も安達さんに引き取ってもらった。私と両親は、これでいいのだろうか、という思いを抱えながら、それを打ち消すように粛々と作業を実行した。私の日常は、病院、仕事場、家が大部分を占め、恋人もいない私は、いつしか心の拠り所を求めていたのかもしれない。そんな私の中で、安達さんと親密になりたいという感情が起き始めていた。

「散らかっていますが、どうぞ」

快く出迎えてくれた安達さんは、今日も作業着だった。

「すみません、お邪魔します」

学生服を日常着にする学生、畑の作業着を日常着にする農家の人。どちらとも似ているようで、どこか違う気がする。私は勧められた木の肘掛付きのソファーにすっぽりとおさまった。で、今日は？(何のご用でしょう)というようなことを言われるかなあと考えたが、急かすそぶりも、不審がる様子もない。安達さんがお茶をいれに行っている間、部屋にあるものを眺めていた。家具や家電のみならず、ぬいぐるみや瀬戸物なんかもある。大事にされているものにかこまれているからなのか、とても落ち着く。そこには非常に穏やかな時間が流れていた。その空気を、ぶち壊したくなくて、聞こうとしていたことも今日は聞かずにいようと思っていた。

帰り際安達さんは言った。

「何か、聞きたいことがあったんじゃないですか？」

そう、私は彼に聞きたいことがあったのだ。

「え？あ、ああ…。どうして、姉のところに何度も来てくれたのかなって。…本当は、前から姉と関係があったんじゃないですか？」

私には打ち明けて欲しかった。

「……」

「本当に、ほとんど見ず知らずの人がただの親切で病院まで来てくれるのかな、って。すごく面倒じゃないですか、そういうの。私でさえ正直、面倒だなんて思うことあるんですよ。…妹なのに、ひどいなあ…。私。…自分でも冷たいやつだって思います。…それでも、ああいつまで続くんだろう、……もう、」

「わかります」

止まらなくなった私の言葉を黙って聞いていた安達さんが、口を開き、遮った。瞳が潤んでいるように見える。

「それ以上は、…僕には伝わりましたから、言わないで下さい。それはあなたを傷つける為だけの言葉で、本心ではない」

「……」

「恵理さんが、不安に思うのも当然です。僕の場合は、…すみませんでした」

「…私、何言ってんだろ、ごめんなさい。こんなことまで言うつもりなかったのに…本当にすみません」

「きちんとお話しすべきだったんです。……理由がないなら、ないなりに」

「…」

「僕にも、…よく分からないんです。病院から連絡があった頃、…いろいろあって。お姉さんとはまったく関係のないことです。僕の問題です。そういうことから、離れたかったからかもしれない。…すごく失礼な言い方かもしれませんが、…単なる僕の気まぐれなんです」

聞いたら、スッキリするかと思っていたけど、聞く前とはまた違ったもやもやが残った。彼の言ったことは本当なのか。嘘をついているなら、そこまで隠す理由は何なのか。いろいろあった、の色々はどういうことだろう。話して欲しかった。私の気持ちに気が付いてやんわりと突き放された、ということか。知らなくてもいい事がある、と何度思っても、知らなくていい事を嗅ぎつけて知ろうとしてしまうのだろう。こんなんだから駄目なんだ私は。ああ、でも考えてしまう。少しの罪悪感とそれらは、ぐるぐる回るだけ。ひとつとして答えのカケラも見つけられぬまま、私はもと来た道を歩いた。

記憶する限り、生まれて初めて自分の陰口を自分の耳で聞いた。それなのに、何もなかったように今、その、言っていた子と一緒に帰っている。私がトイレで聞いていたことをその子たちは知らない。私はいつものように振舞いつつも、不本意だけど身に覚えのある、^レへえこら、という言葉に傷ついていた。

「後藤さんと仲良いの？あの子いじわるじゃない？」

母は、以前私にこんなことを言っていた。その時は友達を悪く言わないでと母を責めた。だが、母は、

「私にはわかるの。あの子裏ボスでしょう」

と、自信たっぷりに答えたのだった。裏ボスという言葉には違和感があったが、裏表がある、という意味では母の言っていたことは当たっていた。

「香織、今日元気ないね」

「そう？そんなことないよ。いつもと変わらないよ」

「そっかあ。まあ、気のせいかな。ねえねえ、今度皆で香織んち遊びに行こうよ」

「ええー、散らかっているからもうちょっと片付いてからならいい、けど…」

「ねえ、知ってる？香織んちのお母さんってきれいなんだよ。都会の人って感じの」

「えー、私も見たーい」

「そうだよ。ほら、皆も行きたいって言ってるよ」

後藤由衣は、お母さんが今居ないことを知っていてわざとこんな話をしているのかと思った。

私は、うっかりそう思ったその顔で由衣を見てしまった。

「え…何？」

「ううん。なんでもないよ。家、ちゃんと片付けておくね。…あ、あたしこっちだからバイバイ、また明日ね」

「うん、バイバーイ」

三人は右へ、私は左へと別れた。一度振り返ると、三人のうちの一人もこちらを向いていて互いに手を振った。

「香織ってさあ、なんか一人でカッコつけてるくせに、人のご機嫌伺い得意だと思わない？へーこらして、たまにうざいんだよね」

…そういう言い方ってひどくない？言いたい事があつたら面と向かって言えばいいじゃない。前はこんなこと平気で言えていたのに、どうして言えなくなっちゃったんだろう。由衣のことだからこんなこと言ったら、開き直って堂々と無視し始めるだろう。クラスメイトで無視された人…発端はいつでも彼女のなにげない、一言なのだ。次は、私かもしれない。

夜八時を過ぎても父は帰って来ず、二人で夕食をとっている時だった。ピンポンと音が鳴り、私は立ち上がり玄関に行った。

「健人くんのお姉さん？お母さんいる？」

「…今、いません」

「何時くらいに帰ってくるの？」

「分かりません。父もまだ帰って来てないので、(用件を)伝えておきますが」

部屋の様子を覗き込むようにして、

「ねえ、お母さんいつもいないの？」

「…そういうわけではないのですが」

旅行中なんて言ったら、優雅なものねとかイヤミ言われそうだし、家、出て行きました、なんて言ったら面白がってそこらじゅうに広められるだろう。この人は、何を言いに来たのだろう。怒っているようだし、ただのお知らせではないことは確かだ。

「あの…学校で何かあったんですか？」

口から殻つき卵を吐き出す。すぐに捨ててしまおうと思ったけど、中身が見てみたくて、片隅に転がしておいた。白っぽくてつるん、としていた卵は、にきびみたいにデコボコができて色も黒っぽくなってきた。一緒に暮らすのは気味が悪いので、軍手をはめて庭に運んだ。スコップで穴を掘った。卵を半分土に入れたまま殻を叩いた。中にぎっしり詰まっていた小さいひと形の影が放出された。それらはあっちこちに飛び散り夜の空気に同化した。穴の開いた殻だけが残った。

「それじゃ、ご両親によろしくお伝えくださいね」

健人のクラスメイトのお母さんは、言いたいことを言うとせいせいした様子で、帰って行った。健人はピンポンが鳴ってから箸を止めていたようだ。

「食べよう」

健人が黙って食べるのを見て、私も食べ始めた。

高い所からぼんやりと眺めていた。

ここは、人の住む家だ。そう思い浮かぶと、確かに私は、高層マンションのベランダの柵を掴んでいた。ここが、橋の上だと思っていたら、そうになっていたろうか。確かめるようにもう一度柵を掴んでいる手を見た。

「何してるの？」

男が立っていた。何か、この人は、実(みのる)さんだと伝えた。

「早く行こう、子供たち待っているよ」

柵から手を離し、踏み出した。後ろから、音をたてて風が吹いた。

私はできるだけ順応する、ということをやめようと思った。

「私、行かない」

「やっぱり……だね」

「え？」

「…ね。」

間近にいるのに、どうしても言葉が全部聞き取れない。実さんは、

「……………」

と笑いながら言った。懸命に理解しようとしているにも関わらず、私には、ただ口をぱくぱくさせている様にしか見えない。

「…」

と言った。身振りから推測するに、待ってて、と。そして、部屋から出て行った。私は一人になると、スカートをおさえながら床に座った。子供が二人、恐る恐る入ってきた。私とさほど背丈が変らない女の子と、それよりももっと小さい男の子。私は自分がどうするのか決めぬまま立ち上がっていた。そして、不安げな眼差しの二人に近づいていった。決めなければならない。この子達が私の何なのか。さもないと、跡形もなく消えてしまうかもしれない。女の子が男の子に何か言った。二人は手をつなぎ、私に背を向け、部屋を出て行った。それでも私の心は定まらず、後を追うこともできなかった。

本当に、一人になったのかもしれない。と、頭に浮んだ瞬間また、知らぬ街に放り出された。私は、どこに向かうともなく、歩いた。誰にも知られず、消えてなくなってもいいと思った。すると、道行く人が誰も自分に気付いていないと感じた。誰の目にも、映らない。私には、見えているのに周りの人たちは見えない。だんだんそれが耐え難くなって下ばかり向いて歩いた。いろんな人の靴がだんだん少なくなって、周りも薄暗くなっていった。灰色の空、灰色の道。それでも私はとにかく真っ直ぐ進んだ。もう、すっかり雑踏を抜けてしまうと、小屋のようなちっぽけな建物と人の塊が見えた。人が三人。そして、こんな灰色の世界で何かが反射したように光った。どうやらそれは、三人が囲んでいるもののようだ。私はその、光るもの見たさに三人に近づ

いた。

「すみません、ここはどのあたりでしょう？」

三人はまるで気が付かず、何か相談をしているようだ。聞こえていないのかもしれない、もう一度と思ったとき、不意に襲われるんじゃないかという恐れが生じた。私は追いかけてもいないのに逃げるように走り出した。足音で追ってくるのが分かり、やみくもに走った。やがて、人ごみに紛れ、完全に道に迷ってしまった。

何度も断っていると申し訳ないというのと、いい人だったら、結婚するのもいいかもしれないという漠然とした期待から、お見合いしてみることにした。

山下さんは看護師さん、なんですよ。大変ですよ。わがままな患者とかいるでしょう。あと、セクハラとか？まあ、大変なのは皆大変なんですけど。僕は時間きっちり決まっていますし、残業もすると言われてますから、楽な方ですかね。え？人間関係なんて、慣れと忍耐ですよ、しいて言えば早く結婚しろというプレッシャーぐらいなもんですよ。ハハハハハ。送っていきますよ、駅まで。あ、それともどこかで休んでいきます？何もしませんよ。初対面でいきなりっていうのもあれか。でも、佳苗さんの違う顔も見てみたいなあ…なんてね。……。そうですか、それじゃあ、乗り換えの駅まで。

私は、見合い相手と別れ、地下鉄の生暖かいホームで電車を待った。アナウンスが流れ、程なく電車がやってきた。座席は空いていなかったの窓際に軽くもたれた。隣にも車両がきて、視線はその先のホームを漂った。…ま、ど、か？

黙って聞いているのも、同罪。そんなこと分かっている。やめなよ、と注意もできない私は、休み時間に教室を出る、という小さな抵抗を試みた。廊下で、声をあげながらプロレスごっこをしている男の子たちの前を通り過ぎ三階の図書室へ向かった。うろうろと歩き回り、取り出してはまた戻しというのを繰り返していた。私は写真やイラストが多いものばかりを見ていた。読書はそれほど好きではないのだ。

何度か訪れるようになると、ここへ来ているのはいつも似通ったメンバーなんだなと気が付いた。貸し出し、返却の係をやっている上級生もいつも同じ人だ。本が好きな人なのかな、とか、他の係の子たちに仕事を押し付けられているのかなー、なんて想像しながら、声もかけられずにいた。その人は、川村、という苗字だった。制服につけている名札で苗字が分かると、下の名前はなんていうんだろう、と気になり始めた。明子とか春美、とかだろうか、いや、リサとか美咲とかだろうか。私はイスに座って料理の本を開きつつそんなことを考えていた。すると、不意に後ろから肩をたたかれ、慌てて振り返った。川村さんだった。今、考えていたことがバレたみたいなのがして、まともに顔を見られなかった。

「これ」

料理本だ。この間借りたやつかな。汚したりしてたのかな。返すの遅れて怒られるのかな。...
ああ、やっぱりこの人本、大好きなんだああ。

「借りる？」

え？

「あ、はい借ります」

何でだろう。

「新しく買ったから、見たいかなと思って」

そう言いながら川村さんは、定位置のカウンターに戻って早速貸し出しの手続きをしようとしている。

「ありがとうございます」

すぐさま席を立ち、私も後を追った。

「料理、よっぽど好きなんだね」

「い、いえ、そう、いうわけでもないんですが」

はいつて言えばよかったかな。なーんだ本に愛がないの？だったら来ないでよ、とか思われちゃうかな。せっかく話しかけてくれたのに。

「嫌いではないんですが、好きというよりは必要に迫られて、というか...」

「そうなんだ。じゃあ、あたしと似たようなもんか」

.....え？どのあたりが？

キーンコーンカーンコーン。

「五限始まる、早く戻らなきゃ、またね」

徐々に昼休みが短いと感じた。私は真新しい本を抱え、教室へと急いだ。

どうして、気付かないの？

今度は何も見えなかった。声が聞こえた。

「ずっといるのに、どうして？」

頭の中がきゅるきゅる鳴って、気持ち悪い。

また、暗闇と多分自分にしか聞こえない音が続いた。

私は他人の夢の中でしか生きられない。

私はいつも誰かのエキストラ。

お金はいっぱいあるのに、どれもこれも、何かが足りない。まあまあいい、は、あっても、これだ、というものが見つからない。でも、どうしても使いたい。朝から私はみすぼらしい格好で街中の店を渡り歩いている。とにかくこの、毛玉だらけのセーターと、毛羽だったスカート、それから見えないけどゴムが伸びたパンツ、ゴムぞうりを全部着替えたい。値段を見ないで買えるほどのお金を持っているんだから、なんだって今よりましな物は買える。でも、とりあえず、は駄目なのだ。高級品店にもズカズカ入っていき、正装したドアマンにすごい目で見られる。オマエノクルトコロジャナイ。そんな心の声も私は、聞かない。だって私は金持ちなんだから。なのに、この店ったら、時計や宝石ばかりで、衣類は一枚も置いていない。ここに用はない。たいして欲しくもないものには、一円たりとも払いたくないのだ。店の重たいドアを自分で開けて、外へ出る。...疲れた。ゴムぞうりが、重たく感じる。外気に当たり、ほんの少し気持ちが揺らぐ。店は、私が欲しい物が見つかるまで、永遠に続くかのように建ち並んでいる。街並みは、全て揃ったら、いや、揃わなくても、今日が終われば消滅するのかもしれない。ここは、異国だ。人？いいえ、これは、よくできたマネキン。私は、このできすぎたマネキンが被っている帽子に目を奪われて、新たな店に入った。入り口を塞ぐようなかっこうで、立ち止まっていると、奥からマダムが駆け寄り、こう言った。

「その帽子は、人形と一緒にじゃなきゃ売れませんよ」

「どうしてですか？」

ほうほうほ一、とマダムは笑った。

「人形分の代金を払ったとしても？」

「(人形が)被るものがなくなってしまうからねえ。きっとあなたの家まで、取りに行きますよ」

...人形が？ありえない。そう否定しながらも、家のドアをぶち壊して帽子を奪い取りに来る人形の姿が浮かんだ。やっと欲しいものが見つかってホッとしたのに。

「それに...あなたが想像しているより高価だと思いますよ」

大丈夫、私に払えないものなどない。

「おいくらですか？」

そう、尋ねると、少し間をおいて、マダムはきっぱりと言った。

「有り金全部。ごまかそうとしても無駄ですよ、分かりますから」

私には、買う勇気も、はっきり要らないと言う気力もなかった。

「どうも」

外へ出た。通りに一台の車が現れ、窓が開き呼ばれた。私の恋人。いつから会っていないのか分からないが、再会を喜びハグして助手席に座り、車は走り出す。私は、今しがたのことを話し始める。うん。それで？とかいう声が聞こえなくなり、聞いているの？と顔を見ると、ハンドルを握ったまま目を閉じていた。大きな声を出したり、思いっきりひっぱたいたりしても、眠りから覚めず、私は横から足を入れて必死でブレーキを踏んだ。スピードはなかなか落ちず、雪の塊に突っ込んでやっと停まった。辺りはしんと静まりかえっている。彼を寝かせたままにしておこうと思う。車から降りて、私はアイスバーンの道をゴムぞうりで滑りながら前に進んだ。そのうち、この道は知っていると感じた。それを確かめようと、頭の中の地図と記憶を頼りにあちこち歩いた。もうちょっと、もうちょっとだけと思っているうちに、ずいぶん遠くまで来てしまった。信じられないことに、恋人が眠っている車の場所をすっかり忘れてしまった。どうしても、少しも思い出せない。それでは、と、もっと前のことを思い出そうとした。...そうだ、欲しいものを買いに来たのだ。いつでも捨てられる物なのに、いつまでも身につけている。今日も捨てられなかった、と思うのが嫌で、私はあの、店が延々と立ち並ぶ街を目指した。

図書系の川村さんと私は、ときどき一緒に帰るようになった。ある日、川村さんは私にこんな話しをした。

「昨日、変な夢、見たんだ」

「夢？どんなの？聞きたい」

「名前なんだ、全然知らない」

「名前？」

私はある名前が思い浮かんだ。

「絶対に覚えておいてって、その子が。本とかテレビでも見覚えのない名前でさ」

川村さんはペンを取り出して、自分の手のひらに何か書いている。

「磨香。たぶん、マコかマカ？何て読むかは忘れちゃった」

怖い話を聞いた時みたいに、鳥肌が立った。私も聞いた、夢で。こんなことってあるのだろうか？覚えていて、というのも一緒。ちょっと、気持ち悪い。

「えー、誰なんだろう磨香って」

実は私も、とは言い出せなかった。

「知らない、小さい女の子だったんだ。ねえねえ、これ見て、って。なんか意味ありげじゃない？」

「う、ん」

「香織は、そんなことってない？」

「...うん、私はない、なあ、そういうの」

秘密を共有するみたいでうれしくもあったけど、同じ名前だなんて、うそっぽくて、言えない。話を合わせる為なら、嘘もつく子って、川村さんには思われなくなかった。

私をあなたは見つけられるだろうか。

たとえ、私の姿や声が定まらなくても。

朝、部屋の中の雑音で目が覚めると、昨日出会った名も知らぬ男が、慌しく身支度をしていた。次の機会を期待していることを会話と態度に含ませるが、二度と会うのはごめんだ、とでも言いたげな、そっけない答えが返ってきた。私は、下着姿のまま、重みで垂れ下るほどつばの広い帽子だけをかぶり男を送り出した。小さな家に不似合いな広い庭。窓際の分厚いカーテンを閉めて、わずかな隙間から男の後姿をのぞき見していると、彼が帰ってきた。庭の途中で、彼と男は出会い、ごく近い距離で、男は彼から何かを受け取り、ジャケットの内ポケットにしまった。私は、もう知っているし、たぶん許している。

それでも、気が付いていないふりをしている。

窓から離れると、私はクローゼットに帽子をしまいこみ、替わりにだぼだぼのズボンとシャツを身に着けた。これで彼を迎える。彼はいつものように、優しい。けれども私の体には決して触れようとしない。

あたしの隣で眠っている娘は、夜になると自分の家を抜け出して、どこかへ出かけている。あたしは、娘の抜け殻を見つめる。あんたになりたい。あたしの体に未練はない。どうにか話をつけようと、あたしは夜通し帰りを待った。そして朝になると、疲れ果ててあんたは帰ってきた。ゆっくり眠れるように、あんたの抜け殻をそっくり引き受けてやろう。さあ、

「柿沼さん、起きて下さい、検温の時間ですよ」

「...留守番しなきゃいけないんですよ、わたしは」

「留守番？..はい、起きて下さい。また、夜に留守番しましょう」

夜じゃ、駄目なんだよ。

近頃、智恵の見舞いに来ると、隣のベッドの柿沼さんが、うなされているのをたびたび耳にする。すぐに治まることもあったが、苦しそうな声が長く続くこともあった。私は、心配、というか、その声が怖いと感じ、ナースステーションまで行って、柿沼さんのことを伝えた。あまり干渉されるのも、嫌だろうと思い、私は智恵のところに戻った。すぐに担当の山下さんがやってきて、大きな声で、柿沼さんと呼んだ。怖い夢を見ているに違いない。いろいろと心労もありそうだ。話を聞いてあげるでもいい、私になにかできないだろうか。そんなことを考えながら、気になって耳をそばだてていた。

「恵理！」

……。呼ばれた気がした。

例えば街中で男女が罵りあっている。私は、なるべくゆっくり歩いて、事の顛末を見たいと思う。そのとき誰かと一緒ならば、「別れ話かな？どっちからだろう？」とか聞いて、勝手に盛り上がりた方だ。智恵は、そういうことを嫌がる。あの人と付き合っ、ああなって、こうなって、浮気されて喧嘩して別れた、みたいな話もほとんど聞いたことがない。「付き合ってる人いるの？」「いるよ」「どんなひと？」「男の人」こんな具合だ。数年前、珍しく智恵のほうから連絡があって、泊まりに行つていい？と、突然言われたことがあった。学生で、夜間の暇を持て余していた私は喜んで迎えた。ごめんね…と、消えてしまいそうな智恵の声を聞いた瞬間、喉に何か詰まったみたいになって私の目から涙があふれた。恵理？何で泣いてるの？と聞かれたけど、答えられなかった。そのときは、本当に笑っちゃうぐらい分からなかったけど、あれは、智恵の涙に違いない。あの日、何か大事なものを失ったのだろう。

「大丈夫ですか？どこか苦しいところありますか？」

山下さんだ。柿沼さんは目を覚ましたらしい。山下さんは同じ様な言葉を繰り返した。

「何だよ」

本当に、なんでもないような声だった。

「あら、また眠っちゃった。小林さん、ありがとうございます。大丈夫みたいです」

「そうですか、良かった。実はちょっと怖かったんです」

「ときどきあるんですけど、柿沼さんはほとんど覚えてないみたい。今も、けろっとしてましたし、後でもう一度聞いてみますから、大丈夫ですよ」

それにしても、さっきの智恵の声は、空耳だろうか。

忘れるなって意味なのか、僕に処分して欲しいってことなのかと考えた。しかしどれだけ考えても、それは僕の考え以上の広がりを持たない。僕の元に帰ってきた、目の前のテーブルは、なんにも答えようとはしない。僕はこれを仕事の一つとして扱おうと思った。まずは、ビニールシートを敷いて、はげたり褪せたりしている所を、塗り直すことにした。部屋の奥から中央へ移動していると、何か小さい物音がした。テーブルをビニールシートの上に置き、薄っぺらい引き出しを根こそぎ引きあげた。……スカスカのフロアーの中で何かが、飛び出したように感じた。そ

れは、同時にしまい込んでいた僕の感情に揺さぶりをかけた。

期末テストの前で部活が休みになり、皆、早く帰っていく。いつもなら、ぽつぽつと生徒がいる放課後の図書室も今日は電気すらついていない。外は薄暗くなり始めていたが、私はここにいますという意思表示を避けるように、スイッチには触らなかった。席はどこも空いていたのだが、私は川村さんがいつも座っている貸出しカウンターの中のイスに座った。

メール到着の音に反応し、僕はパソコンの前へ行った。
件名なし。本文、

ガラガラガラ。足音もなく突然扉が開いた。ハっとした私は扉の方を見た。誰もいない。気が付いてしまったから、もう見えなくなったのかと思った。前だったら、そこには川村さんがいたのではないかと。

「どうしたの？おばけでも見てるような顔して」

「…び、びっくりした。本当におばけかと思った」

「そう、私は香織にだけ見えるおばけです」

「…やっぱり、そうだったんだ」

言葉とは裏腹に、ああ、真奈美ちゃんは、存在していると確信した。

「やっぱりって！どいうことだよ」

電気をつけて、私の向かいに座った。

「面白いことがあってさ、」

真奈美ちゃんは、白い手をカウンターにのせて話し始めた。

「こうなったらいいなって思うことが、まじで当たったから、香織にも教えようと思って」

「ん？なにになに？」

「自分でメアド考えて送るの、知らない人に。メッセージは五文字以内。一発で誰かに届いたらオッケーってやつ」

「ふーん。で、真奈美ちゃんは、なんて打ったの？」

「苺食いたい。そしたら、次の日、隣のばあちゃんが持ってきたんだよ、苺。こんなことなら、金が欲しい、とか頭良くなる、とかにすればよかったと思って」

「へえー、すごいね。」

「まあ、隣のばあちゃん、よく食べ物持って来るからたまたまかもしれないけど、なんか、面白いから試してみてよ。別に、届かなかったら不幸になります、とかじゃないしさ」

「うん、家に帰ったらやってみる」

彼女なら、お化けでもいい。

私は帰り道、真奈美ちゃんと別れてからもずーっと五文字とでたらめなメールアドレスを考えていた。そして、家に着いてパソコンを開いた。

戻ってきて。

本文にはそれだけが書かれていた。送信元に見覚えはなく、ただのいたずらかと思ったが、なぜだか僕は、そのメールに返事を出した。

僕は相手に合わせるかのように、端的に質問した。

—誰に？—

—お母さん—

—いなくなったの？—

—そう。突然いなくなった—

僕は元基のことを思った。

—どうしてだろう？—

—分からない—

—知らないほうがいいこともある—

—私は知りたい。それがつらいことでも—

たとえ、もう一度逢えたとしても、僕は本当の気持ちを伝えられないだろう。

—穴があいて、ふさがらない—

僕の穴はふさがるところか、あいていることを忘れるくらい、体に馴染んでしまった。

—ふさいでくれるものはないだろうか？—

—ない。絶対に—

僕は確かに、痛みを感じた。もう止まらなくなるんじゃないかと怖くなった。もう、このやりとりは終わりにしよう。そう思いながらも、次の言葉を見ずにはいられなかった。

—お母さんがどう思っている、私は傍にいて欲しいって伝えていない—

僕の家が壊れた。

屋根は吹き飛び、骨組みだけになって目の前に乾いた土地が広がった。やせた土台にしがみつくように残っていたものたちもやがて倒れ、地面のでこぼこになり、初めからそうだったみたいに平らになった。

僕だけがいる。

誰かをなんの見返りなしに愛することなんてできるのだろうか？

大きな帽子を手でおさえ、スカートの裾をひらひらとなびかせながら、女性が近づいてきた。抜け出してきたんだ、と思った。僕もまた、抜け出してきたのだろう。絡まないようにと切断していた頭と心の線が、再び繋がったみたいだった。僕は噴出すように溢れてくるものを、ただ、出し続けた。そして、僕の震動に触発された部屋中のものたちが声をあげ始めた。僕のものじゃない感情や記憶までもが体中をめぐり、もう、破裂しそうだ。

「順也」

窓に向かって立っていた僕は、呼ばれて振り返った。霞んだ目で見たからだろう、その人が誰かを見誤った。

智恵、そう呼んでから気が付いた。

「安達、さん...？」

「.....」

「ごめんなさい、(玄関が)開いていたものだから..」

「恵理さん。..今度こそはじめから、きちんとお話します」

覚醒し続けていて、私は少し疲れてしまったようだ。思い残すことは何もない。もう、眠ってもいいかなと思った。

「はい、申し訳ありません。すぐにこちらから振込みますので。はい、今日中には必ず。はい、失礼します」

ちょうど三ヶ月くらい前にも同じような電話があった。母は恋人とうまくいっているのだろう。うれしいことでもあるが、寂しくも感じる。母にお願いされたわけでもないのだが、私は電話を切ると、出かける準備をした。そして用事を済ませると、さっさと家に帰って来た。

...くたびれた。

私もまどかのように、ふっといなくなりたい。そんな気分だった。

私の現実他人が思っているよりつまらないと思う。誰かの想像の中で生きているほうがずっと楽しいに違いない。

つまらないと、リアルだって思う。いいことがあると夢じゃないかって思う。

痛み、それから...情。

夢の中の私も、そのときは現実。

生きている限り、逃れられない全て。

「マカにまたあったよ」

真奈美ちゃんという約束している窮屈さも約束していない不安もない。

「真奈美ちゃん・・・変なこと聞いていい？」

「変なこと？なにになに？」

「.....やっぱ、変じゃないかも」

真奈美ちゃんは空気が読める。でも、人に、へーこらなんてしないんだろうなあ...

「香織、なんか嫌なことでも言われた？」

「ううん」

なんか、泣きそうだ、私。

「知ってる？私のカゲあだ名、オカルトっていうんだよ」

「..な、なんか...微妙に、おか、しい」

私たちは声をそろえて笑った。

「でしょう？私、妖精と友達です、とか、幽霊が見えますとか一切言ってないのにだよ」

「どうしてだろう。..でもなんか分かる気もする」

「そう？..まあ、家、神社だしね。オカルトといえばオカルトだね。野菜作って売って生活します、とかじゃないし。でも考えてみれば、会社だってオカルトじゃん。何やってるのかよく分かんないし」

「うん。...あ、だからうちのお父さん会社辞めたのかな」

「だとしたら、勇気あるね。うちの親、少しは抵抗したらしいんだけど、結局跡継いでいるしね。ああ、ごめん、私ばかり話して。なんだっけ？聞きたいことって？」

「うん。どうやったら人に嫌われないのかなあ、なんて思ってさ」

「うーん。..難しい質問ですねえ」

「人のこと考えないと自己中だって言われるし、人のことばかり気にしてると、へーこらしてるって言われるし。私には加減が分からない」

「メーターとかあるわけじゃなし、それは私にも分かんないなあ。でも、私もこわいよ、嫌われるの」

真奈美ちゃんは顔を上げ、正面を通り越し、空を見ていた。

「私、皆を好きになんてなれないし、そう考えると誰かは私を嫌いって思うのも自然なことなのかなって思う」

思いを言葉に出せなくて、私も空を見た。

「マカには思いでも未来もない。それってどんな気分なんだろうね」

向こうから、しゃりしゃりと音をたててマラソンしている人が通り過ぎた。私はその見知らぬおじさんの背中を振り返り見た。

「思い出も、未来もあるんじゃないかな。そのときそのときで」

「...そうだといいね」

智恵が入院して、一年がたった。

あの日、安達さんの話を聞いて、智恵の言葉や行動、安達さんのそれもまた、私の頭の中で瞬時に繋がった。

ここ半月、仕事が忙しくて病院にもろくに顔を出せなかった。面会時間は少し過ぎていたのだが、私は病院へ向かった。なんだか、無性に智恵に会いたくなっただ。

病室に入ると、柿沼さんがいた、手前のベッドが空いていた。どっちだろう。退院できたのならいいなと私は思った。

「こんばんは」

驚いて、振り向くと、山下さんだった。

「すみません、時間過ぎているのに...入っちゃいました」

「いいんですよ。お仕事、忙しいんですか？」

「暇なときはひと月の半分休みだったりするのに、今月は仕事が重なってしまっ」

「そうだったんですか」

「..安達さん、来てますか？」

「ここしばらくは、いらしてないですね」

私の様子を察してか、山下さんは、

「お話して行って下さい。時間は大丈夫ですから」

と笑顔で言い病室を出て行った。

じゃあね、ちーちゃん。また来るね。

耳元でささやいた、その声の余韻が心地よく響いていた。

私は起き上がり、窓を開けた。頬に風を受けた。それは、いつか感じたことのあるような、なつかしいものだった。そして、その気流に時間も、体も委ねた。

冷たい雨の日曜日だった。

私は自分の部屋で、ベッドに寝転んだまま、天井の木目の数を数えていた。だんだんだんだん、と階段を駆け上がる音がして、ドアが開いた。

「お姉ちゃん、お母さんが帰って来たよ」

え？

「健人、ちゃんと見て、この人はお母さんじゃないよ」

健人がお母さんと呼んだ女は、母とは似ても似つかぬ、犬で言えば番犬のような女だった。

「お姉ちゃんったらわざとこないじわる言っているのよ」

「あなたは誰ですか？」

「誰ですかって、あなたたちの母親よ、ねえ健人」

母親だと思っているんだから、いいじゃないの。あんたもおとなしく騙されたふりしていればいいのよ。その方があんたの為にもなるよ。

「健人、お尻を出しなさい。お姉ちゃんにこんなこと言わせて黙っている罰よ」

女は、健人を片手で腹からすくい上げ、尻を出し、カナヅチで叩きだした。私は女に飛びかかろうとして、あっけなく腹を打たれた。床でうずくまっていると、健人が耳元で囁いた。

「僕も分かっている。でも、追い出せないんだ」

「どうして？」

「この人が新しいお母さんだから」

「お姉ちゃん？」

え？……。

「健人、本当のお母さんだった？」

「そうだよ。早くおいでよ」

私は健人に腕を引っ張られながら下へ降りた。

「健人、タオル持ってきて」

玄関から、確かに、母の声が聞こえた。健人は二階へタオルを取りに戻り、私は一人で玄関に向かった。傘を持っていなかったのか、お母さんはずぶ濡れだった。

「ただいま」

本当にお母さんだ。

「おかえりなさい」

私は言葉が続かず、黙りこくってしまった。雨で仕事を引き上げてきたお父さんが、玄関でお母さんと対面し、二人はどうなるかと思ったが、お父さんは、おかえり、とだけ言ってさっさと風呂場へ向かった。追うようにお母さんも行った。私はお母さんに聞きたい事はいっぱいあるけれど、今はそれを聞くときじゃないと思う。もっと色んなことが理解できるようになるまで、とっておこう。そのときでも、遅くはない。

公園、ではない。駐車場、でもない。畑、でもない。私はそこを、余った土地と呼び、その低い草むらにひざを抱えて座った。小さな丘の向こうから女の子が近づいてきた。彼女の目に私はどう映っているのだろう。野良猫？迷子？おじいさん？

私の視界いっぱい女の子が映る。

次の瞬間、くる、くると反転させられ、真っ暗になった。伸びたり縮んだりしてみたけど、私の形は一向に変っていなかったらしい。

クローゼットの中。

いつも暗いし、かむ虫がいるし私は外に出たかった。どうやったら外に出られるか一生懸命考えた。持ち主のミカコさんは、あまり開けてくれない。けれども、もう一人この家に住んでいる女の人—誰も呼ばないし、名乗らないし名前は分からない—は、部屋が暗くなると、毎日のように開けるのだ。ミカコさんは多分「彼女」のことを知らない。いつもは二人のミカコさんの家に、たくさん人が集まったことがあった。ミカコさんのお誕生日パーティーだったみたい。「彼女」はその日、まだ明るいついていうのに、クローゼットを開けて、私を外に出した。彼女の体はひんやりとしていて血が通っていないみたいだった。鏡に写った彼女も私もとってもきれいだった。それなのに、この家の人たちったら、誰も褒めてくれない。

ねえねえ、この女の人はいだあれ？

ミカコさんのスカートを引っ張りながら子供が言った。この人って指差されているのは「彼女」。しばらく子供は私たちを追いまわし、ミカコさんは子供を追った。

私たちはクローゼットに隠れた。

皆が帰ってから、ミカコさんはクローゼットを開けて、開けた隙に「彼女」は外に出て、私はミカコさんに掴まれた。

あー、やっと着てくれるんだと思ったら、真っ黒い袋の中に放り込まれた。

カオリちゃんのお母さんは、私を妹だよとカオリちゃんに言った。わたしはお母さんにうんと甘えて、カオリちゃんとも仲良くなろうとした。お友達になりたかったから。だけどカオリちゃんは、わたしを怖がって遠くへ行ってしまった。

あの人は、部屋の至る所に目を向けてわたしを探した。あなたは誰ですか？と。あなたというのはわたしのことだとすぐに分かったけど、誰かといわれると、うまく答えられない。だから黙っていた。あの人は、はじめは私のことを気にかけているみたいだったけど、だんだん私のことは忘れていったみたい。わたしはいつもここにいるわけじゃないから。

たくさんいた同居物たちは、日に日になくなり、あの人は、家の掃除をはじめた。私はもうすぐ無くなるだろうに。

あなたは私に気が付くだろうか、たとえ私の姿、形が変わっても。

私はかつて、こんなことを言った気がする。もしかしたら、思い浮かんだだけで、そんなこと一度も言っていないのかもしれないし、誰か私じゃない人が言ったのかもしれない。

「また、いつか会おうね」

順也さんは、そう言って、空っぽになった家を出た。

仕事道具の買出しを頼まれた私は、若松中央病院を横目で見えて通り過ぎた。買い物帰り、肩にいっぱい荷物を掛けた私は、信号待ちをしながら病院を見ている。あそこに行けば、智恵にまた会えるんじゃないかと思ってしまうのだ。信号が変わっても、渡らないでじっとそこにいた。もう一度信号が変わった。私は肩の荷物を持ち直し、再び歩き始めた。

混線

<http://p.booklog.jp/book/34883>

著者 : Kevin Spring

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kevinspring/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34883>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34883>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.